

明治期「博物館学」の面目

— 坪井正五郎博士の業績 —

The Progress of Museology in Modern Japan

— The Achievements of Dr. Shogoro Tsuboi —

邊 見 端
Hajime HENMI*

1

日本に於ける博物館の思想は、明治維新前後、文明開花の風潮の最中欧米より齎された。その先駆とも云うべき施設は程無く設けられたが、物的資料を展示することから、当初博覧会と甚だ混同していた。しかし、先進諸国を範に明治30年代後半には、施設や設備・資料の充実のみならず、独自の欧文研究報告書を刊行するものが出現するなど、一応の体面を保つに到ったらしい。

この間の歴史的な変遷については、多くの専門書が論ずる处であり、今更の言は要しまい。しかし、それらの多くは、公文書や上申書等に依拠したものであった。従って自然、内容は設置・運営の変遷に止まり、博物館の本質に迫るものは絶えて無い。況してや、そこに「博物館学」の萌芽を認めて、その意義を探究するものなどあるはずもなかった。

抑、博物館史の執筆に際して、館及び設置者関連の資料だけを渉猟し、そのみに依拠していたのでは、その館にとって手前味噌を並べたものになりかねない。仮令、博物館史と言えどそれが歴史である以上、史学に於ける方法を見捨てることは許されない。即ち同時代史料を批判吟味してその中に構築しない限り、当事者側に副った館史資料の羅列となること火を見るよりも明らかである。

このような館史に対する反省に立って明治時代史料を探查するならば、博物館の設置運営に直接しない、むしろその利用者とも云うべき学者や一般市民の中にそれに対する切実な声を目の当りにすることが出来る。その種のものの中には、設置者側の資料では到底知るべくもな

い館活動への批判が存在したりもする。時には、博物館の在り方を先進諸国の智識を踏まえて展開したものも見受けられる。猿真似ではない、独自の考証も始まりつつあったのである。それを知ることなくして日本博物館史はなく、また博物館学の根本を理解することは出来まい。

本稿では、聊か資料不足の憾みはあるが、坪井正五郎博士の博物館に対する見識に焦点を当て、明治期博物館学並びに博物館の実際を理解する縁としたい。

2

先ず坪井正五郎博士の経歴を博士自身の手になる「東京帝国大学理科大学教授理学博士坪井正五郎小伝」(『日本之小学教師』第1巻第6号、明治32年9月15日刊)と、山崎直方氏の「理学博士坪井正五郎君を悼む」(『東洋学芸雑誌』第30巻第382号、大正2年7月5日刊)と、『人類学雑誌』第28巻第11号(同年12月10日刊)所載「故坪井正五郎君小伝」を基に簡単に紹介することにしよう。

博士は、文久3年正月5日、江戸浜町(現、東京都中央区日本橋浜町)の邸に蘭医坪井信良の子として生まれている。少年の頃より理学に興味をもつが、折も折、大森貝塚や陸平貝塚の調査が行われるなど欧米より伝えられた人類学や考古学の成果が世間の耳目を驚かしていた。そこで博士は急速にそれらへの関心を深め、明治14年9月、東京大学入学に際しては理学部を選んでいる。同学部では動物学を専攻するが、それは当時の遺跡調査が動物学者に依って行われたことと無関係ではないらしい。

昭和61年1月31日受理

*へんみはじめ

東北学院大学

そして、19年7月に卒業する。この間、16年4月刊行の『東洋学芸雑誌』第19号に福家梅太郎氏と共に処女論文「目黒土器塚考」を投稿している。17年11月16日には、沢井廉、白井光太郎、福家梅太郎、佐藤勇太郎、有坂鋁蔵、岡田信利、菊地松太郎、宮沢作次郎、神保小虎、丘浅二郎、斎藤賢治、細木松之助、松原栄ら13氏と共に人類学会を創設し、19年2月10日に到りその機関誌『人類学会報告』（後の『東京人類学会雑誌』）、現在の『人類学雑誌』を創刊している。この会にあっては、死後に来るまで常に中心的な存在となり、人類学に関する論文は殆どその機関誌に投稿することとなる。

大学卒業後は、直ちに大学院に進み、人類学を本格的に専攻するに到る。明治21年9月、同大学理科大学助手に就任。この年5月刊行の『東京人類学会雑誌』第3巻第27号に「三十国巡回日記、第一回」を載せ、その中で神苑会の博物館設立計画を紹介すると共に、それに対して行った助言を纏めている。博物館に関する処女作である。

明治22年より3年間、人類学研究のため英仏両国に留学。この間の成果は逐一纏め、その都度「パリ通信」「ロンドン通信」と題して『東京人類学会雑誌』上に報告する。当時パリでは万国博覧会が開催されており、その展示は人類学を通して博士に博物館学的な関心をも惹き起こさせている。これと留学中の博物館観照体験は、後年の博物館学的研究の基礎となったらしい。

明治25年、英国人類学会々員に推薦され、10月帰朝と共に理科大学教授に任じられる。翌年の講座制設置に際しては、人類学講座担任となる。

明治32年2月、東京帝国大学総長の推薦により理学博士の学位を受ける。同年10月25日刊『東洋学芸雑誌』第16巻第217号に「土俗的標本の蒐集と陳列とに関する意見」を投じて、資料展示法について蘊蓄を傾ける。また、それに基づいて、パリ万国博覧会へ出品の「日本古今住民の生活状態を示す標本」を、品物の見せ方を見せるという意図のもとに作製する。帰朝後7年、ここに博物館学的成果が名実相伴い開花するのである。また、36年4月25日刊行の同誌第20巻第259号に第5回内国勸業博覧会に関連して「人類館と人種地図」を発表している。

この間、明治33年12月に国立博物館創設計画委員、翌年1月に理学文書目録委員会委員となり、更に39年9月には帝国学士院会員となっている。

明治44年7月より翌年3月に到る間、命に依り欧米諸国を巡回することとなるが、この時も博物館展示の観

照を怠らなかった。その見聞報告は、「世界一周雑記」として逐一『人類学雑誌』に発表し、また『東洋学芸雑誌』や『中央公論』にも寄稿している。

大正2年、露都ペテルスブルグ開催の第5回万国学士院聯合大会に帝国学士院を代表して出席。5月26日、病を得て当地に急逝。享年50歳。法諡、温故院殿観智正悟大居士。

3

坪井博士が専攻した人類学は、その分科として人類に関係する多くの学問を含んでいるが、取分け考古学と民族学や民族誌に関するものが際立つ存在となっていた。その研究に際しては、白井光太郎氏が『人類学会報告』第1号（明治19年2月10日刊）の「祝詞」で早くも指摘したように「実地実物ニ就テ考案」する態度が求められていた。従って此学に於ては、常に真物たる実物資料の観照が必要であった。ここにそれら資料の蒐集、そしてそれを保管展示する施設の存在が求められるようになる。

実物を展示する博物館の思想は、幕末に既に伝えられていたと言われるが、それは必ずしもその本質を理解した上でのことではなかった。それに副う形で設立が模索されるのは、明治10年頃からのことである。例えば人類学や考古学と係わりをもつ分野では、東京大学教授として招聘された米国人エドワード・シルヴェスター・モース氏が大学に列品室の設置を求め、人類学と動物学について実現している。同じ頃、教育博物館の設立についても惜しみなく協力している。尤もこのような行為の背景には、彼等御備外国人のこの国の事物に対する学究としての態度があり、また教育の場にある者として、その資料の確保と、保管の場の獲得といった意味合いも存在していた。いずれにしろ、曲りなりにも先進国からやって来た学者達によって博物館の思想は実践されつつあったのである。

しかし、それもモース氏らの辞任と共に急速に形骸化し、或は休眠状態に陥る。遺跡の発掘調査報告書ではあるが、彼の著わした『Shell Mounds of Omori』（Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan, Volume I. Part I, 1879.）と、その教えを受けその調査にも参加した佐々木忠次郎氏が飯島魁氏と共に調査して著わした『Okadaira Shell Mound at Hitachi,』（being an appendix to Memoir Vol. I. Part I. of the Science Department, Tôkiô

Daigaku, 1882.) とを比較するならば、御備外国人の努力が如何に定着し難かったかを理解することが出来る。当時の日本人学究の活動は、外見の模倣に終始して、未だ内実を伴っていなかったのである。博物館施設も例外ではなかった。正にその頃、坪井博士らは活動を開始する。それは図らずもモース氏らの目差したものを受継ぐ形となる。博士が参画した人類学会では、会員を通して積極的に全国から人類学上の資料、殊に考古学的な遺物の蒐集保管を心掛けている。

そして、明治20年8月には、博士による「人類学当今の有様、第一篇」(『東京人類学会雑誌』第2巻第18号)において、

理科大学動物学教場附属の古器物は前の大学教授モース氏の集め始められたもので昨々年の調査に因れば七百餘品ござります今日では是から見ると古器物の数も増しましたし又現在諸地方で用ゐて居る器物も集まつて来まして考古学上の陳列品は変じて人類学上の陳列品と成りました

と述べられるまでに到る。しかし、当時社会の常として欧米の学界や博物館への意識は強く、次の負け惜しみともとれる文が後に続くことになる。

我々はコートルフュージ氏が世界第一と大言するパリスの博物館フラワア氏が全世界無類と誇称するナショナル、ミュージアムの様なる人類学標品陳列所は有しませんが研究の材料は身邊に堆積して居ます海近き丘には貝塚甚多く小山を望めば横穴夥多列り古墳諸所に散在し古器物亦無数なり<中略>北の方北海道に至れば毛深きを以て有名なアイノ人あり<中略>我々の風俗習慣は今将に一新せんとす容貌骨格といひ智識言語といひ研究の材料実に甚多し我々は大人類学博物館中に在る者と云ふ可く又大人類学実検室中に在る者と云ふ可きで有ります

研究資料を大量に保管する欧米の博物館に対するこの意識こそが、博士をしてその種施設の充実に積極的に向かわせる原動力となる。尤も、その背景には、後進国日本の実情に対する青年学徒達の苛立ちがあった。前掲の白井氏の「祝詞」には、次のように露に記されている。

我邦内地ニ遺存スル古跡遺物及人種論ノ如キ外国人ノ探究スル所トナリ我邦人ハ惟其探究ノ結果ヲ視聴スルニ止リ絶テ之カ是非ヲ論スルコト能ハザル<中略>今ヤ海外各国ノ学士ニシテ我邦ニ駐在スルモノ甚多ク各相集テ学会ヲ設立シ我邦ノ事物ヲ探究スルコト甚盛ナリ今ニシテ人類学会ヲ興サズンバ遂ニ彼

士輩ニ就テ自国ノ事ヲ問フニ至ラン豈痛歎ノ至ナラズヤ勿論、この文が著わされた明治19年頃迄に、我が国民による国家的な博物館事業は既に推進されてはいた。それは在留外国人の動きに先行していた。しかし、その推進者は、為政者に纏わる旧態依然としたお調子者の学者達であった。それ故、その内容は外国人によるものの比ではなかった。それは、その後のこの種施設が遭遇する低迷の実態と、関係した学者達の学問的な内実を見るならば充分に知り得ることである。左様であるからこそ、真に実物資料を欲する国民は、欧米の学問のみならず博物館の智識にも過敏に反応するようになる。彼等においては、博物館は所謂社会近代化のための啓蒙の具、今風に言えば社会教育のための施設などと言う生易しいものではなかったのである。

さて、この頃、三重県度会郡宇治山田に博物館設立の動きが現われている。『神苑会史料』(神苑会清算事務所、明治44年12月30日刊)に依れば、明治19年6月、同地に於ける神苑会に規則書が作られ、そこに収められた「神苑会規則」第一条に、

本会ハ神苑会ト称シ、神宮域外ノ規模ヲ拡張シ、一大神苑ヲ開キ、普ク天下ノ奇観ヲ蒐集シ、以テ公衆ノ遊覧ニ供スルヲ主旨トス

と記される。そして、その主旨達成の一環として同会は歴史博物館の設立を企画し、福地復一氏(帝国博物館勤務)に取調を依頼することとなる。

坪井博士は翌年10月20日、同氏の訪問を受け、その相談に与かっている。ここに博士の博物館に関する蘊蓄がはじめて傾けられることになる。その内容は、博士の「三十国巡回日記、第一回」(『東京人類学会雑誌』第3巻第27号、明治21年5月刊)に詳細である。

福地氏が博士に示した腹案の中から要点を摘出し、簡条書に纏めると、

- 博物館と云ても東京に在るものゝ写しを作る様では面白くない
- 何とか専門を定め此事ならば伊勢へ行けば分かつと云様に仕度
- 人類学の博物館とし、館中には諸種の標品を陳列し園中には各国古代諸建築の模造を置く

の三点となる。これに対して坪井博士は、

夫は誠に宜い御企でござります私の後来の研究の爲には人類学博物館と云ふものが出来れば結構此上の無い事ではござります

と。人類学を専攻する者にとって、それに関連した博物館の設立が如何に有益であり、歓迎すべきものであるか

を先ず明言している。勿論、単なる儀礼的な発言と見る人もいよう。しかし、以前に発表の論文や、人類学会に参画した白井氏の文から推して決して左様とは考えられない節がある。しかも、可成り真摯にこの相談に乗っていたであろうことは、その後の文によって知られる。即ち、この計画に通り一遍の支持を与えたのではなかった。

元々神苑会と云ふ会は両宮に付いて起たので有て見れば苑中の博物館も成る可く之と関係有る様に致し度、太神宮様に人類学とは餘り縁の無い事で有るし且社殿を距る遠からざる所に人骨を飾り解剖図を掲げると云ふも応はしからず一時は面白い事故賛成者が有るでござりませうが好く考へて見れば永く続かうとは思はれません、

世間に流行を遂うこと熱し易く冷め易きは、日本の世の常。当時も変わりなかったのである。人類学は、正に流行の一であった。確かに形振構わず世間の流行に乗れば一時的には大成功を収める。博物館もまた、その例に洩れない。博士は、それを充分に知悉した上で、博物館の展示内容が「設立母体の目差すもの」と「場所柄」とから遊離しては決して永続きしないことを指摘したのである。博物館の少ない、しかも満足でない当時であってこれを言い得たことは、正しく卓見と云うべき、現代に於てすらこの愚挙に陥るもの数多と聞く。

ここに、博士の提言が出る。

本邦古来風俗習慣の変遷を示すと云ふ事にして他国の物は只参考の為に副へる位に止め館の名も風俗博物館とでも為しアンスロポロジカル、ミュージアムと云ふよりは寧日本のエスノグラフィカル、ミュージアムと云ふ様に致し度園中に模造するものも古墳、塚穴、貝塚、横穴、堅穴、環状石籬杯の類に限り度し、本邦の風習遺跡は追々に失せて行く事故何れ何所かに集めて置き度き所なるに伊勢の太神宮の側とは実に何れの点から見ても最適當な場所有る。と。即ち、日本古来の風俗習慣を扱う博物館にするならば、信仰を通してそれを伝え来った伊勢神宮の地には最も相応しいものになると同時に、消えつつある資料の保存にも一役買おうと勧めている。極めて堅実な内容である。更にその存在意義について、

如此したならば神徳を明にし神苑会を盛にし学者には研究の材料を与へ従覧人には国風に付きての智識を与へ誠に一挙多得の事業と成ると信じます、

と指摘する。場所柄、設立母体、利用者のいずれをも満足させ得るものとなるのである。この他に「物品蒐集の手續」や「陳列の心得」について話し、更に後日改めて

書面に「所存の大略」を認め送ったと云う。その書面の存在した事実は、前掲『神苑会史料』明治22年6月初旬の記事が収録する「神苑会創立事務所引継報告書」に依って知ることが出来る。それには「庶務部主管書類目録」が添付されており、その「明治二十一年度自一月至十二月帳簿ノ部」に、

一坪井・福地ノ苑地ニ関スル書類一括
と記されている。

以上の神苑会に係わる博士の助言は、決して思い付きではない。一には、人類学者として考古学や民族学の実物資料を実際に扱った体験、そしてその実見を冀求した体験が反映されている。物に対する理解があったればこそ、設立母体との関連や場所柄といったものを的確に判断し得た。当時であって、日本に居ながらこれだけの内容をもち得たことは驚きである。恐らく背景には、人類学を通して博物館の有益性を知り、相当程度欧米の博物館の知識を書物に依って吸収することに努め、また大学の列品室の充実を図りつつ考えるところがあったのであろう。兎も角、博物館施設を学問的な深みをもって考え究めようとする試みが存在したことは、特筆に値しよう。因に、この博物館は、『神苑会史料』に依れば明治24年5月8日に農業館、同42年9月29日に徴古館として開館する。現在の神宮徴古館、農業館である。

4

君途を印度洋に取り先づ仏京に到り万国博覧会を觀、大に資料を集め転じて英京に到り留学すること三年、主として大英博物館其他の諸博物館を訪ひ深く自から研鑽する所あり、

（山崎直方氏による前掲追悼文所収）

博士は、明治22年より25年に到る3年間、人類学研究の為、パリを経由して英国に留学している。この間、山崎氏の追悼文に依っても知られるように人類学の定法に従い、専ら実物資料を蒐集保管する施設を訪ねて見聞を広めている。その成果は、逐一「バリー通信」「ロンドン通信」として『東京人類学会雑誌』に報告される。その内容は、単なる見聞記ではなく、実見した実物に即して人類学のみならず博物館に係わる諸事象を考証したものとなっている。ここに博士の博物館に関する蘊蓄が遺憾無く發揮されることとなる。

日本出發後、程無く博物館の有用性を海外に在て再認識する。第4巻第43号（明治22年9月28日刊）所載「バリー通信」に、

シンガポール＜中略＞市中には博物館が有つてマレ

イ人種の家屋船舶の雛形及び日用品武器等も陳列してござります、此所は是非行く可き所でござります、と。このように今となつては何でもないような博物館等展示施設に関する記事が、これから度々紹介されることとなる。しかし、それは日本に在って人類学を志している人々に、博士の目を通してその種施設の存在意義を強く印象づけることとなつたに相違ない。

パリに着くと早速開催中の万国博覧会に出掛けている。元々物見遊山ではなく、目的をもつものであったことから、

一千八百八十九年即ち本年のパリ万国博覧会は前代未聞万国無比と称する程の大仕掛けにて目を驚かす物が夥しく有る計りで無心から感服する物も沢山ござります、

と展示物の中に玉石混淆の様を的確に捉えることとなる。そこで、

私の博覧会縦覧の主意は人類学研究上益を得やうと云ふに在るのでから此広い場所を悉く歩き此夥多な品物を残らず見る杯云ふ事は企てません、着以来六日間続けて入場しましたので大略の様子が知れましたから第七日目即ち七月三十日からは目的の物を熟視する事を始めました、

と。観照目的を果たすために、先ず全体の概要把握に努め、それに基づいて目的に副うものだけを選択し観照するという。展示施設の利用に際して無闇矢鱈に出掛けても効果は少ない。その展示概略を豫め知ってこそ能率よく目差す目的を果たすことが可能となることを自らの行動を通して指摘しているのである。

見聞が進むにつれて、人類学資料そのもののみならず、次第に展示に於ける利用者への配慮についても関心が向くようになる。第5巻第44号(同年10月28日刊)所載「バリー通信」に、

室の中央には釜形の椅子が有り何所向きにでも随意に腰が掛けられる様に有る、

と。また、同巻第46号(同年12月28日刊)所載「バリー通信」には、

ドクトルMies氏の工夫にかゝる頭骨示形の新法標品、之は厚紙に頭骨の縦断、横断の形を多く書き切り抜いて互に井桁の様組み合せ頭骨の全形を作り出した物之には頭骨の上面下面の写真を厚紙の表裏に貼り左右側の写真を厚紙の表裏に貼り両方共に前後の軸を半ば載て互の平面が直角を為す様に組み合せたのもござります、

とある。勿論、当初はそれらの巧みさや物珍しさに昂奮

し、目を奪われているかのようでもあった。しかし、時日の経過と共に冷静な判断が芽生えて来たらしく、展示に対する批評や自らの提言も発せられることとなる。

博士が観た博覧会の「人類学部物品陳列」は、前掲「バリー通信」の中で、

正面入り口の前に在る古墳内部の現物、各地掘出の古器物、ブッシュマンの実大模形等は何の故に最初に出て来たのか訳が分からず正面入り口三所の中何れが第一だかも示して無い<中略>右から入つて見た所が人体解剖と比較解剖との標品は此室にばかり集まつて居ると云ふでも無く中央室を飛び越して左室にも一部二階に上つて中央部にも一部有る事故好く見やうとするには此所彼所奔走しなければならず、石器も所々方々に一群一群に列べて有つて比較に不便だし<中略>掘出品許りと心得て見て居ると現用品が混じて居たり現用出かと思つて見れば古代の物を想像して作つたので有つたり<中略>実に意外な事だらけ、〔文中「出」は「品」の誤植か〕

と評されるように、展示物が何の脈絡もなく各部屋に押し込まれ、それでいてそれらの配置図も示されていないといった実情であつたらしい。このことは、欧米を範に研究を進めてきた博士にとって、少なくとも博物館については一つの自信に結び付くこととなつたに相違ない。

嗚呼、バリーは人類学の中心とも言はるゝ地に非ずや、本年の万国博覧会は規模広大なるものに非ずや此地に聞きたる此会の中此専門の部にして物品陳列の法が理学的で無いとは如何なる訳であるか有名な人類学者の整理したものを私風情の者が彼此云ふのは実に螻蛄が鉄車に向ふ様に見えるでござりませう併し螻蛄にも眼があります、車輪の円いカイビツかは見分け得る積でござります、

日本であれこれ試行錯誤してきた物品陳列法(資料展示法)、それを最早欧米に頼る訳にはゆかない。自らの力で切り拓かなければならない。これに目覚めた時、先進国の展示に対する幻影は消え忌憚のない批判が生まれることとなる。

専門家の為に作つたのなら取調べ上の不便言ふべからず専門外家外の人の為めに作つたのなら斯学の主意を解する事難し何れにしても陳列法宜きを得たりとは決して言ふ能はず〔文中「外」は衍字か〕

このような纏りのない展示が如何に利用者にとって都合なものを指摘し、展示はそれを利用する者の立場に立つて行ふべきことを示唆している。物の配列は学問の成果に基づき、しかも見せてやるのではなく、見たいよ

うに見て戴くという態度がそこに必要なのである。これ即ち過去のことにあらず。対岸の火事にあらず。現在の博物館もまた肝に銘ずべき点である。

付箋に注意さへすれば解かる事では有りますが一寸通り掛りの縦覧人中には陳列の意が知れない故に人身測定器を見て医術器械、諸人種の眼色の見本を見て入れ眼だ杯と早合点する者がござります、解説を付けさえすれば、ラベルを付けさえすれば何処に何を置こうが構わないと云った態度はいけない。

三月の雛にも飾り方有り、五月の幟にも建て方有り
絵の順が好ければ読まなくとも草双紙の作意は大概推量出来るものなり

即ち展示に「一主義を貫徹」し、物に具わった法則を尊重しさえすれば、付箋に頼らなくとも大要は理解出来るのである。当時の日本に在って、これも正に卓識と云うべきであろう。そして、以上のようなあるまじき事態が現われた原因について、

全く室の都合、棚の都合、箱の都合左右相対前後照応杯と云ふ所に在る様なり、物品は本なり、入れ物は末なり、入れ物の形状大小の爲めに物品陳列の法を曲げたとは呉々も、残念なる次第ならずやと考察を加えているのである。

第5巻第47号(明治23年2月28日刊)所載の「パリー通信」中には、博物館活動に係わる「古器物模造品の印し」「古器物破損の修繕」「埴輪土物の陳列法」「物品陳列上に鏡の応用」の四項がある。それらのうち、特に前二項の肝要な部分を以下に引用する。この時期の博士の学識を示す好資料である。

・古器物模造品の印し、古器物の中には得難に物が多く有りますから比較研究の用に充てる為模造をするのは甚好い事でござりますが模造品には直に模造品と云ふ事の解かる様な印しを付けて置かないと大なる間違ひを生ずる事がござります、大きさ、形、色丈を示すとて模造には物をば印しの無い為に真物だと思ふと其物質、堅さ、重さ、摩擦の跟迄も実に斯く有るかと思ひ誤るが如きは誠に研究上の妨げで益を得る為に作つた物が反つて害を為します、殊に出来の好い模造品へ印しを付ける事を怠つて置かうものなら時日を経るに従つて終に真物と混ざる恐れが有り夫れのみならず或る蒐集品中に一個の模造品が混じたと云ふ事に成ると正しい物迄が怪し気に成る恐れがござります、＜以下略＞

・古器物破損の修繕、古器物は破損した為に質のよく解かる事が有るので其儘にて用を為す事も多くご

ざりますが全形に因つて考案を付ける為には修繕も必用でござります、併し此修繕も前の模造と同様で遺存の部分と区別の付き易い様にして置かないと往々有害と成ります、修繕の行き届き過ぎたのは見る人の考を助けると云ふよりは反つて見る人を斯くと云ふ事に成ります、＜以下略＞

以上、「パリー通信」の中で取り上げられた内容は、決して現在に比し遜色あるものでない。今尚、銘ずべき事柄である。これ、果して筆者の買い被りであろうか。

5

明治25年帰朝後、博士は、東京帝国大学理科大学人類学教室に於て、留学の経験を生かして種々の展示法やそれに係わる器具の考案を模索したらしい。例えば明治27年4月25日刊行の『東洋学芸雑誌』第11巻第151号所載「雑報」は、「貝塚の縦断面を示す装置」の項を設け、同教室にて門外漢にとり聞いただけでは判りにくい貝塚内部の様子を示す装置が作製されたことを報じ、

是は高さ三尺五寸許り幅一尺五寸許り深さ一尺許りの木箱の正面にガラスを張り其内部に貝殻を充て此所彼所に種々の古物を挟みたるものにして一見貝塚存在地に臨みて其縦断面を検するの感あり

という評を紹介している。また、翌年2月25日刊行の同誌第12巻第161号所載「雑報」は、バテを用いた「土器の押し形の元を示す便法」に依つて多くの標本が作られていることを報じている。それらの製作には、恐らく博士の意向が強く反映していたことであろう。

そのような博物館学的な研鑽の一端は、パリ万国博覧会を翌年に控えた明治32年10月25日刊の同誌第16巻第217号に「土俗的標本の蒐集と陳列とに関する意見」として発表される。

事の順序としては標本蒐集が標本陳列に先だつ事勿論でござりますが、物を集めるに当つては何か主義を立て置くのが必要で、此主義と云ふものは其物を何にするかと云ふ目的に由つて定まるものでござります。今述べやうと云ふのは、土俗的標本を人類学上の役に立てる様に陳列するには如何にしたら宜からうか、随つて此目的に適ふ様に標本を集めるには如何に心掛けたら宜からうかと云ふ事でござります。夫れ故に最初に陳列法を申して次に蒐集法を申しませう。

これは、飽迄も人類学やその資料に関心を寄せる人々を対象とする展示施設を例に考えているが、総ての分野

に共通する内容と見て差支えない。資料の蒐集に際して、無関矢鱗に物を集めることを先ず戒めている。兎も角、展示の目的を考え、それに従って行われなければならないことを指摘しているのである。当り前の事と評されるかも知れないが、当時にとっては斬新なものであった。そして、以下に展示に関する具体的な考えが述べられることとなる。

最初に展示構成の在り方について触れている。それは留学中に観照した先進国の博物館展示への批判を通してなされる。パリのトロカデロ館土俗部やルーブル館土俗部、及びロンドンのブリチシムuseum土俗部について、何れに於ても諸種族の品物が夥しく集まつて居ると云ふ事は認めましたが、只地方別け若しくは種族別けにして有る丈でござりますから、何所には如何なる物が有ると云ふより深い感じは起こりませんでした。

と。ラクスフロードのタイラア教授管理の人類学標本陳列所について、

諸物品が地方にも種族にも関係せずに、衣服とか武器とか云ふ様に部類別けに従つて置いてござりました。一寸面白うござりますが、是では又何れの品を如何なる種族の者が用ゐるのか分かり悪い。

と。これらに対して、

私の考へでは土俗の標本を人類学上の役に立てる様に陳列しやうと云ふならば、大体を地方別け又は種族別けにするが宜しいが、各部に於ては各の人民の生活状態を一目の下に明かにする様に到すが肝要と思ふのです。

と述べている。そして、個々の資料の展示については、土俗中異同の最も著明なものは身体装飾並びに衣服でござります。在来の陳列法(若し法と云ふを得るならば)に従へば、頭飾り、頸飾り、耳輪、指輪、腕輪、足輪、衣服、履き物等を各其儘に壁に掛けたり、箱に入れたりして、説明の札を付けて置く位に過ぎないのでござりますが、斯くては故らに或る事項を調べやうと云ふ念を起こした者の他には明かな感じを与へやうと思はれません。

と。これら一連の批判は、極めて当を得たものと言える。勿論、物足りない所もあろうが、現在の常識をもって比較するは酷というよりも愚かである。このような見識ある展示観が出される背景は、博士自身がかつて研究資材の乏しい後進国の駆出しの人類学者として、先進国の博物館展示に期待し、そこに智識を求めた折の観照体験であつたに違いない。物によっては、未知のものもあつた

であらう。その種のものに接した時、展示法に於ける到らざる点に迷惑し、その研究の必要性を深く認識することが出来たに相違ない。左様でもなければ、「斯くては故らに或る事項を調べやうと云ふ念を起こした者の他には明かな感じを与へやうと思はれません。」といった生々しい感想など生まれよう筈もない。そして、それらについての模範的な展示の具体案として、

大きい板の中央に男女全身の写真なり図画なりを固着して置いて、其周囲に順序好く諸種の身体装飾品や衣服の小部分、履き物杯を配置して括り付け、此実物と写真或は図画中其物の示して有る部とを赤なり青なり場合次第で最も見別け易い色の糸を以て結び付けて置いたら好からうと思ふのでござります。仮りに茲に耳輪が有るとすれば、之に色糸の一端を結び付け、他端は写真なり図画なり耳輪の示して有る部に孔を開けて此所を通して確と固定するのでござります。物を見て其用を知るにも、写真或は図画を見て其実物を知るにも、斯うして置けば間違ひの生じやうはござりません。大きな物は必しも全部を添へて置くには及びません。其小部分でも好し、或は縮小模造でも好し、其趣きを書き付けて、置きさへすれば宜し。衣服如きは寧ろ其方が分かり易からうと思ひます。＜以下、衣服の構造製法・住居・飲食・記号文字・日用器具・礼儀等関係諸案省略＞
〔文中「り」は筆者補充〕

を上げている。更に、その展示の基本方針について、成る可く文字を書かず、出来る丈解説を省いて、しかも多くの文字を列ね長い説明を添へたよりも理解し易く仕やうと云ふのが、此陳列法の意でござります。

と述べている。近年に到るまで、博物館の多くは、これとは逆に長蛇の文字を列ねた解説を付して来た。正に雲泥の差である。何故に、博士のこの考えは顧みられることなく学史の彼方に埋もれてしまったのであろうか。その原因たるや、博物館史上、甚だ興味ある所でもある。それは兎も角として、博物館存在の意義は、真物を自由に観照出来るところにある。利用者が餘りにも長い解説に頼らざるを得ない状態に置かれたのでは、読了に疲労し、真物の観照が疎かになること明白である。そのみならず解説氏の主観が知らず知らずのうちに禍し、客観的に観る眼が失われる恐れも出て来るのである。博士は、それらの点を充分に心得ていたと考えられる。

博士の考えは、人類学教室からパリ万国博覧会へ出品される「日本古今住民の生活状態を示す標本」の中に活

かされることとなる。その標本の目的は、

今回の出品は品物を見せると云ふよりは品物の見せ方を見せると云ふ方に重みを置いたのでござります。

とあるように、単に日本の人類学的資料を出品するのみならず、むしろそれらを通して展示法を示すことにあった。それは、博士が博物館学に係わる自分の考えを自ら実践する最初であり、またその適否を世に問う最初でもあった。それへの反響如何許であったか極めて興味深いところである。筆者、未だそれを搜し得ていない。

6

独自の展示法を世に問う機会が再びやって来る。

明治36年3月1日より7月31日に到る間、大阪に於て第5回国勧業博覧会が開催される。そこに人類館が付設され、琉球人、台湾土人熟蕃・生蕃、アイヌ、マレイ人、ジャヴァ人、マドラス人、トルコ人、ザンジバル人等を招き、彼等をその風俗と共に展示し、更に標本陳列の部分設けたと云う。そのようなものは、屢々外国で行われていたことではあるが、我が国では初めての試みであった。これに坪井博士は協力している。標本陳列の部に、人類学教室から諸種族土俗品を貸与し、その出陳のため松村瞭氏を派遣している。更に博士自身の立案に成る「世界人種地図」（大野雲外氏画）をも調製して管理者からの依頼に応じている。その概要は、『東洋学芸雑誌』第20巻第259号（明治36年4月25日刊）掲載の博士による「人類館と人種地図」に詳細である。

このような博士の協力もあって、この「人類館」は好評を博し、成功を取めたらしい。勿論、展示方法については博士の意向が反映されたことであろう。同誌同巻第261号（同年6月25日刊）の「雑報」は、「第五回国勧業博覧会」という見出しの同誌記者の批評を載せている。先ず全体について、

大阪の博覧会は其地積の広袤なると規模の宏壮なると出品の夥多なることを以て従来のものに比し頗る進歩の状を示したるは誠に慶ぶべし<中略>唯大体に於て進歩せしと断言するのみさて其陳列法装飾法に至りては未だ以て足れりとなすべからず

と評し、続けて「教育館」について、

殊に教育館内の如き各区分当の狹隘なると列品の不統一なるとに至りては観覧上の不便少からず甚だ遺憾とする所なり且何故に教育館の名の下に陳列せられたりやと疑はるゝもの二三にして止まらず

と酷評する。そして、

之に反して加奈多館参考館の如き外国出品に至りては陳列法の巧なる取て以て我模範となすべき点少からざる様覺えたり

と。その頃の日本は、日清戦争に勝ち、片務的治外法権の撤廃に成功し、そのみならず世界の強国イギリスと対等に日英同盟を締結するなど、国内は可成りの自信を深めつつあった。それでも矢張り、文化面では西欧諸国に歴然とした遅れをもっていた。井の中の蛙ではいけない。己惚れを排し、冷静に自らを眺め、外つ国々の長きは進んで我が物としなければならない。

次に「水族館」についてその長短を論じ、最後に「人類館」を扱い、概要を示した上で、

奇観にして併せて知識を啓発せり

とその価値を評している。この項で興味深いのは、本記者氏が共鳴してその後に続けて載せた同館員の談話である。それは、先ず

此館の設立は元より私利の爲めにあらず是等未開人種の実状を世人に示すの学問的価値の極めて多大ならんと思惟せしを以てなり

と設置者側の展示の意図を紹介する。そして、更に然るに世人は此意を解せず鐘鼓相喧しき台湾劇や笛唄相騒ぐ琉球踊を以て耳目の娯楽とす誠に遺憾なり何卒世の教育家の一顧を煩はしたし学生諸子等の爲めには観料減額の規定もあり云々

と。即ち入館者の多くは、展示の意図を解さず、次元の低い所で満足し悦に入っている。このようなことがあると、一般に博物館関係者は、展示の失敗、または社会教育に問題があるかのように指摘する向きがある。しかし、それとこれとは別問題。人類館員氏は、その依って来る源を充分に認識している。教育全般に問題があるのである。殊に学校教育の中で、早くから博物館の利点と活用法を説かない限り、よき利用者は生れないし、またこの種施設の充実もあり得ない。

因に、松村瞭氏は「大阪の人類館」（『東京人類学会雑誌』第18巻第205号、明治36年4月20日刊）の中で、

人類館なるものが日本に設立せられたのは、今回を以て嚆矢となすのである、日本人には物新しい為めか種々の批評もある様である、實際其の規模も小く、集められた諸種族も日本版図内或は比較的多く吾人の眼に触るゝ所の種族で其他一般の設備も不完全たるを免れないが、私立で然かも短日月間の事業としては恕すべき所もある、兎に角今回人類館が世人に与ふる利益は少くないと思ふ、

と評している。

兎も角、「人類館」については、当時の智識からみて非難さるべき点が殆どなかったのである。「教育館」のところで「加奈多館参考館」が模範的とされているが、少なくともそれに劣るものでなかったことは確かであろう。それは、恐らく多少なりとも関係した坪井博士の影響大であつたればこそその成果であつた。

博士の展示法への努力は更に続けられる。明治37年1月25日刊『東洋学芸雑誌』第21巻第268号所載の「雑報」は、「人類学教室より万国博覧会への出品」という記事を伝えている。同年、米国〔セントルイスか〕にて開催の万国博覧会に関連するものである。

理科大学人類学教室よりの分は日本石器時代遺物一覽にて、大なる箱を縦横に仕切り、縦列を見れば地方地方の遺物の種類を知り、横列を見れば遺物の地方的異同を明かに為し得る様に工夫せしものと云ふ。〈中略〉尚ほ対照に便する為、区分の番号を記入せる遺跡分布地図をも添へたりと

と。専門家にも、素人にも理解しやすいように工夫されたものである。これは、正に博士の従来を考えを実践した一例と言えよう。この時期の展示活動の一端を示すものには、他に博士自身の執筆に係る「人類学標本展覧会開催趣旨設計及び効果」(『東京人類学会雑誌』第19巻第219号、明治37年6月20日刊)や「東京府管内太古遺物陳列場」(同誌第22巻第257号、明治40年8月20日刊)等がある。

博士の博物館学的な研鑽は、恐らくこの後も続けられたに違いない。今のところ管見では、その實際を示す資料を見出すことが出来ない。しかし、明治44年7月に欧米各国へ差遣された際にも、翌年3月の帰朝に到る迄、各地の博物館の展示を熱心に観照するなど、それに対する関心は衰えを見せていない。それらの見聞報告は、「世界一周雑記」として逐一『人類学雑誌』に寄せられ、第27巻第6号(明治44年9月10日刊)より始めて第28巻第9号(大正元年9月10日刊)に到るまで12回に分けて連載された。同様の報告は他に、『東洋学芸雑誌』第29巻第365号(明治45年2月5日刊)に掲載された「坪井博士より興学会員への書簡」や、『中央公論』第27年第5号(同年5月1日刊)所載の「博物館のいろいろ」がある。また、同誌記者の求めに応じて、第27年第10号(大正元年10月1日刊)には「明治博物館と日本版図内の諸人種」を執筆している。そして、翌大正2年5月26日、博士は欧米に於けるそれらの観照体験を学問の域に迄高める機会をもつことなく突

然ベテルスブルグに客死する。

当時、「帝国第一の博物館」と称された東京帝室博物館の展示について、明治44年1月1日刊『歴史地理』第17巻第1号所載の英蛾氏による時評「博物館当事者に望む」は、

吾人密かに考ふるに、東京博物館の美術部に於ては恐くは學術的論鋒を以て刺激を与ふるだけの価値ある陳列法も説明法も未だ其の緒にさへ達し居らざる有様なるべしと、其系統なき陳列、統一なき列品配置、説明指導の便宜なき、此を以て帝国模範の博物館として其体面を保持するを得べきか、

と酷評している。博士が20年来、外国館等を例に縷々述べて来たことに、博物館は馬耳東風とばかりに全く意を注がなかったのである。否、博物館人にその能力がなかったのかもしれない。これを考える時、博士の50年の生涯は餘りにも短く、日本の博物館にとり多大の損失であった。正に惜しむべき人材をなくしたのである。

7

これまで人類学者坪井正五郎博士の博物館学的な業績を四項に分けて私見を交えながら紹介してきた。

博士が博物館施設に関心を寄せるようになるのは、偶然のことではなかった。人類学の分科としての考古学や民族学は、いずれも物的資料を研究の基礎に据えていた。即ち研究に際しては、何はともあれ真物たるそれに直接する必要があった。正に、この種の学問自身が「真物たる物的資料を学問的な配慮の基に展示し、恒久的に公開し、人々の縦覧に供する場」としての博物館(注)を常に利用する立場にあったのである。これは、基本的には今でも変わらない。勿論、博物館に限定したものではなく、それに類似する資料館とか、博覧会の展示をも時には利用することがあった。いずれの施設にも共通するのは、実物を展示することである。それらの中で取分け有益なのは、博士が強調しておられたように、特定の方針に従って計画的になされた展示である。しかし、当時の日本には、人類学は疎か他の分野にも満足なものを見ることが出来なかった。

そこで博士は、人類学に益する施設を模索しはじめる。見聞を重ねてはそれを批判し、また論述を新たにし、更に展示方法を考案しては実行に移す。確かに当時、博物館学と云うものは存在しなかった。しかし、これまで縷々紹介し、また批判し来た内容によって知られるように、その中身は、全く博物館に関する学問と言って過言でない。勿論、類似のことを言った人が全くなかった訳

ではない。しかしながら、これ程までに生涯を通して自分の専門と共にそれに対して意を注ぎ検討を重ねた人は、この人を措いて他にいない。日本に於ける博物館学の祖とも云うべき位置にあるのである。

我々が現在の博物館を考える時、このような先人の業績を等閑にしては、その根本を見失いかねない。既に今日に到るまで、各種の専門書や講座の刊行を見たが、そのいずれもが明治時代の学問的な足跡を疎かにしている。そして、中には見るべき研究業績もなく単に海外の紹介やその焼直しでもって本を著わすことに終始したような人を神様の如くに扱っているものさえもある。次元の低い言論や現象や流行に煩わされては学問にならない。博物館学が学問たり得る為には、学史を踏まえつつ資料批判を綿密にして、物事の本質を捉えてゆかなければならないのである。その意味で学史の彼方に忘れ去られた坪

井博士の業績は、先ずもって注目する必要がある。それは、明治と言えど現在に比し決して遜色あるものでない。

（注）博物館の概念については、拙稿「博物館とは何か」（『東北学院大学博物館学芸員課程報』第1号，昭和60年4月8日刊）を参照されたい。

<付記>

本稿の作成に際しては、國學院大學大学院講師保坂三郎先生から御教示のみならず博物館並びに博物館学に関連する書籍をも賜わった。御厚情に、記して深謝の意を表する次第である。しかし、それらの総てを使いこなせたか否か甚だ心許無い。到らざる点に就ては更に研鑽を積み、後来の論文に於て正してゆくこととしたい。